

館報 教育記念館



きらめき未来塾 【思考道場】



きらめき未来塾 【お笑い道場】



さんすうワールド展



ものづくり展

主な内容

- ◎教育時評 富山県総合教育センター 所長 麦谷 直人 2
- ◎第28回 郷土の先賢顕彰者 高桑 敬親・谷口 節道 3
河合 平三・継続顕彰者
- ◎特別展 「富山県内の幼児教育（幼稚園・認定こども園）活動紹介展」 6
- ◎恒例展 「第9回児童・生徒によるものづくり展」
- ◎恒例展 「第16回さんすうワールド展」 7
- ◎「きらめき未来塾」 お笑い道場 右脳活用道場 思考道場
- ◎平成30年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎恒例展「第15回子どもの目 自然不思議発見写真展」 8



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
 TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
 (教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
 発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



学校教育を支える教職員研修の実施に向けて

富山県総合教育センター

所長 麦谷 直人

総合教育センターでは、調査研究、教職員研修、教育相談、生徒実習、教育資料の収集と提供、県立学校の事務の支援など、多様な事業を行っています。教職員研修については、若手教員研修や中堅教諭等資質向上研修などの年次研修、科学教育や情報教育、教育相談、生徒指導、特別支援教育に関する研修などを行い、教職員の資質向上を支援しています。また、校内研修活性化研修会や、研究主事が学校等に出向き実施する訪問研修を通じて、校内研修の支援にも努めています。

近年、教員の大量退職に伴い若手教員が増え、教職員の年齢構成や経験年数に不均衡が生じ、かつてのように先輩教員から若手教員への教育理念や指導技術の継承がうまく図られていない状況があるとされています。また、知識基盤社会の到来など、社会が急激に変化する中で、学習指導要領の改訂に伴う教育課程や授業の改善、いじめや不登校への対応、特別支援教育の推進など、教育現場は多くの課題を抱えており、学校が直面する課題に適切に対応できる実践的な指導力を有する教員の育成が課題になっています。

平成27年12月の中央教育審議会の答申を受け、教員養成や研修体制の整備を趣旨として、教育公務員特例法の一部が改正されました。教員育成指標の整備と10年経験者研修の見直しが主な内容です。県教育委員会は、教員のキャリアに応じて求められる資質を確認し、生涯にわたって学び続ける教員が育つことを目指した、教員育成指標を策定するとともに、11年次教職員研修を見直し、今年度から中堅教諭等資質向上研修を実施しています。

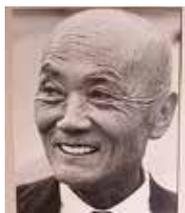
この研修は、学校内のミドルリーダーの育成をねらいとし、採用されて7～11年次の教

職員を対象に実施するものです。研修のねらいを踏まえ、組織マネジメント研修や年次交流研修を行います。とりわけ年次交流研修は、10年次教員と2年次教員が校種別のグループに分かれ、2年次教員が作成した資料をもとに、学級運営や学習指導などについて研究協議を深めていきます。10年次教員は進行・助言役として2年次教員の実践上の悩みなどを引き出しながら、自らの経験を踏まえ助言します。受講者アンケートからは、2年次教員が同年代の協議からは得られない学びの深まりを感じていることや、理想とする教員像について意識している様子が伺えます。一方、10年次教員は若手教員の頑張りに触発され、これまでの教員生活を振り返り、ミドルリーダーとしての自覚と責任感を高める機会になっているようです。また、勤務校のミドルリーダーとして教育活動に取り組むための資質能力の向上にもつながっていると考えています。

私自身の経験から、センターの集合研修では、教育の動向や新しい知識・技術を効率的に学び、また受講者の情報交換から多くの刺激を受けました。一方、勤務校では、先輩教員などから教材研究や学級経営などについて具体的に学ぶとともに、教員の仕事に向かう姿勢などから、理想とする教員像を追究してきました。

「教員は学校で育つ」と言います。これからも学校や教員を支えることができるよう、学校や教員の立場に立って、研修ニーズをしっかりとつかみ、教職員研修の充実・改善に努めていきたいと考えています。

第28回 郷土先賢室顕彰者紹介



幻の民謡「こきりこ」を再興した郷土史家

たかくわ けいしん
高桑 敬親 (1900~1981)

敬親は、明治33年(1900)11月、東砺波郡平村上梨(現南砺市上梨)に、高桑長松の長男として生まれた。高桑家は、上梨に代々続く円浄寺の住職の家系である。大正15年(1926)、富山県師範学校(現富山大学人間発達科学部)を卒業した敬親は、平村の東中江尋常小学校(現在は南砺市立上平小学校に統合)の訓導(現在の「教諭」となった。当時の敬親は、その風貌から子供たちに「栗頭」と呼ばれ、怒ると顔が真っ赤になる様子を「栗が弾けた!」と、怖がられていた。

昭和5年(1930)の夏、詩人西条八十が、民俗学者柳田國男から教えられた「こきりこ」の調査に平村を訪れた。西条が、柳田から教えられた「こきりこ」の一節を愛唱していることを知った敬親は、「こきりこ」が深い意味合いをもつ唄なのではないかと考え、独自に調査を始めることにした。しかし、村の古老たちを訪ね回り、7、8人の「こきりこ」を知る者に出会うものの、歌える者はいなかった。そうするうちに、上梨に住む山崎しいという女性にたどり着いた。彼女は、子供の頃に中屋の太助という老人から「コッケラコ」という唄を教えられたと話し、2本の煙管を打ち鳴らしながら歌ってくれた。こうして昭和9年(1934)、山崎しいから歌詞を採集し、「こきりこ」再興がはじまった。

昭和14年(1939)、敬親は、五箇山研究にあたっていた高岡高等商業学校(現富山大学経済学部)教授小寺廉吉と共に、雑誌『高志人』に「越中五箇山の民謡」という論文を発表した。その後、『飛騨人』にも発表し、これらの論文が、東京のNHKに勤めていた小寺融吉(廉吉の弟)に届けられると、昭和19年(1944)に「こきりこ」を録音する運びとなった。しかし、戦時下の厳しい統制のため中止となった。

「こきりこ」を後世に長く伝えたいという思いから、敬親は、昭和26年(1951)8月に「越中五箇山筑子唄保存会」を設立し、会長に就いた。その当時は、唄のみで踊りがなかった。教壇に立つ傍ら敬親は、古老からの聞き取りや古文書調査を行い、踊りや衣装の再現を急いだ。上梨出身の永森そよが「右足出して、左足出して、くるりと回って、二足流して、三足歩いて、くるりと回って手を打つ」と語った動きが唄に合致したことから、これを基に踊りを定めることができた。そして、昭和28年(1953)年5月10日、上梨白山宮の建立450年祭に「こきりこ」を奉納する運びになった。翌年5月には、富山産業大博覧会において「こきりこ」を披露した。その後、全国各地のイベントに多数出演し、「こきりこ」が広く知られることとなった。

「こきりこ」の再興に努める傍ら、敬親は五箇山の民謡、歴史や地誌、産業、民俗や方言、伝説、合掌造り等の調査研究を手掛け、数々の論文を発表した。その功績が評価され、昭和39年(1964)11月に、県政功労者として表彰された。

昭和52年(1977)、『平村史』の編纂委員の一人に指名された敬親は、村史刊行に向けて精力的に活動したが、昭和56年(1981)11月21日に、村史の完成を待たずに病没した。

<専門員 松田 啓宏>

平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



国際的な感覚を備えた芥川賞作家

ほった よしえ
堀田 善衛 (1897~1988)

射水郡伏木町(現高岡市)で廻船問屋を営む堀田勝文、くへの三男として生まれた。

昭和6年(1931)3月、伏木尋常小学校を卒業後、石川県立金沢第二中学校に入学した。昭和14年(1939)4月、慶應義塾大学法学部政治学科に入学、翌年には文学部仏文科に転科した。大学時代、伊集院清三との出会いをきっかけに『批評』の同人となり、詩を書き活躍した。

上海で終戦を迎え、昭和22年(1947)1月に中国から帰国後、昭和26年(1951)まで多数の作品を発表した。昭和26年(1951)には、「廣場の孤獨」「漢奸」で芥川賞を受賞する。

昭和52年(1977)5月、スペインへ移住し、昭和62年(1987)12月までの約11年間スペイン滞在した。この間、画家ゴヤの長編伝記『ゴヤ』四部作を完成させ、第4回大佛次郎賞を受賞する。

平成6年(1994)、高岡名誉市民となり、平成7年(1995)には長年の文学的業績により朝日賞を受賞。平成10年(1998)3月、日本藝術院賞を受賞した。同年9月5日、脳梗塞により死去。享年80歳。

<専門員 松本 純>



孤児や恵まれない子供たちに人生をささげた人

たにぐち せつどう
谷口 節道 (1901~1986)

節道は、明治34年（1901）6月29日、上新川郡蟠川村小杉（現富山市小杉）に塚越石次郎、ヨシの間の7人弟妹の長女として生まれた。本名はセツである。信仰篤い母親の和讃を聞き、先祖の命日、年忌といった仏事が大切にされる環境で育った。

明治41年（1908）蟠川尋常小学校へ入学、堀川尋常高等小学校高等科、県立女学校と進学したが、大正7年（1918）中退し、望まれて弟子となり、仏門に入るため曹洞宗靈眼寺谷口泰乗の養女となった。この年の夏に得度し、谷口節道尼として歩み始めると、名古屋の関西尼学林へ入学し、勉学や修行に励んだ。節道17歳であった。大正13年（1924）実践女学校に入学したが、その後、宗祖道元の思想を深く究めようと、先輩の尼僧と共に、駒澤大学初の女子学生としてひたすら学問に打ち込んだ。

昭和3年（1928）駒澤大学を卒業し、曹洞宗大本山総持寺本山事業部の託児所へ勤めることとなった。元来子供好きで先生志望であった節道は子供に溶け込むのも早く、優しく穏やかな性格で周囲の信頼を集めた。この経験がもととなり、以後17年間、神奈川県や新潟県の幼稚園や託児所に勤務した。昭和20年（1945）4月、師匠泰乗尼の病状悪化の報を受けて富山に帰り、看病に尽くしたが、終戦を迎えた後の11月、師匠を看取ることとなった。

昭和21年（1946）、戦災孤児の窮状を見かねた曹洞宗尼僧団が、救護施設をつくり、孤児の面倒を見ることとなった。育児経験のない尼僧たちの中で保母経験があった節道は「わたしがやりましょう」とその役を買って出た。

節道は東京の戦災孤児2名を連れて富山に戻った。雪の中靈眼寺にたどり着き、20年以上荒れ放題になっていた寺で抱き合うようにして眠った。節道はこの時、親を失い、浮浪していた子供たちが安心して暮らせるように守り、成長させることに全身全霊を捧げようと心に誓った。昭和22年（1947）1月のことであった。

当時はまだ食糧難・物資不足の時代、節道は親戚や近隣の農家に頭を下げて食べ物に分けてもらい、節道自ら衣服を縫い、托鉢をしながら日々の窮状をしのいだ。施設の名称は戦災孤児の精神を癒し、新しく生まれ変わるための心の花園でありたいとして、釈迦生誕の地にちなんで「ルンビニ園」と名付けた。東京の戦災孤児の受け入れを続け、昭和22年（1947）4月から子供たちが地元の小学校に通学するようになった一方で、逃亡が相継ぎ、節道は富山駅にとどまらず遠く上野まで子供を連れ戻しに行くこともあった。

やがて園の存在が知られるようになり、徐々に物資や協力金が届き窮状を脱すると、施設を拡充した。昭和30年（1955）頃からは家庭不和、放任、離婚など親の都合で入所する子供が中心となった。昭和33年（1958）には昭和天皇皇后が^{（ごほうご）}行幸啓され、「みほとけにつかふる尼の はぐくみに たのしくあそぶ 子らの花園」と歌が贈られている。

子供達から「庵主（あんじょ）さん」と慕われた節道は、どんなに迷惑をかける子供がいてもひたすら自愛の心をもって受け入れ、学校を卒業させ、送り出した。卒園生が、ルンビニ園の仏様の前で結婚式を挙げたり、卒園生の子供の名付け親になったり等、節道と子供達のエピソードは数知れない。昭和35年（1960）には藍綬褒章、46年（1971）には勲五等瑞宝章を受章。昭和61年（1986）5月遷化した。85歳「布施・愛語・利行・同事」の道元の願に殉じた生涯であった。

<専門員 松井 功一>

平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



「思いっきり自己表現ができる場」を求めて
「雪ん子劇団」を創り、育てた仏者

ゆきやま たかひろ
雪山 隆弘 (1940~1990)

昭和15年（1940）、大阪府高槻市の浄土真宗常見寺の次男として生まれた。

早稲田大学文学部演劇専修に進学後、大学だけでなく劇団「四季」などでも演劇活動に没頭した。

卒業後は産経新聞社の記者やニッポン放送のラジオのパーソナリティとして働いた。この間、北日本放送のアナウンサーをしていた雪山玲子と結婚した。

その後、妻の実家である善巧寺（宇奈月町浦山）の後継者として得度し、善巧寺を「開かれた寺にしたい」と考えた。旧知の永六輔の協力を得て落語会を開催したり、心豊かな子供たちを育てようと日曜学校を開いたりした。だが、もっと自己表現できる場として児童劇を始めたいと思い、昭和54年（1979）11月25日、ことばの教室「雪ん子劇団」を誕生させた。

初舞台は、昭和55年（1980）3月26日、ミュージカル『うちのとうちゃんえらいんだ』、ぬいぐるみ劇『なかまたち』であった。劇団創立から11年目の平成2年（1990）9月、生涯を終えた。享年50歳であった。県内外での公演数は、80回を超えていた。

<専門員 根塚 昌志>



庶民に開放された私塾“混放洞”を開いた教育者

かわい へいそう
河合 平三 (1830~1878)

平三は、天保元年（1830）、砺波郡下山田村（現高岡市下山田）の伝右衛門の三男として生まれた。幼年のころから向学心に燃え、家業を手伝う傍ら寸暇を惜しんで学問に励んだ。7歳の時、富山藩士近藤士専（儒学者）に漢籍の素読を受けた。9歳の時、加賀藩13代藩主前田斉泰に召され、士専に同道して登城し、漢籍の素読を行って非凡な才を賞され、床飾りの「獅子頭石」を拝領した。その後、弘化3年（1846）、16才の時、加賀藩士鶴見小十郎（儒学者）に師事、また嘉永3年（1850）、京都に上って漢学者梅ヶ辻春樵に教えを受けるなど更なる研鑽を重ねた。

安政2年（1855）、帰郷して分家し、農業を営む傍ら、自宅前に土蔵を建て2階に漢学塾の「混放洞」を開設した。吉田松陰が松下村塾を引き継ぐ2年前のことである。幕末の越中には500を越える寺子屋や私塾があったが、恩恵に浴したのには家柄のよいものや金持ちの子弟に限られていた。「混放」という言葉は日本ではほとんど使用されていないが、中国では、これを人に対して用いた場合、「身分の異なる人を集める」という意味で使用される。また、「洞」は、奥まった場所を意味した。これらのことから混放洞とは、「身分にかかわらず人を集めて世に出す奥まった場所」という意味であり、向学心のある者に広く門戸を開き、有為な人材を育てたいという平三の思いが込められていると推測される。

平三は、この混放洞で砺波、射水地域から平三を敬慕して集まった少年らに歴史、地理、医学、薬学、算学等を教えた。学舎は土蔵の2階（約5.5メートル×3.6メートル）を用いた。東西両側と南側の小窓より僅かに明かりがさす一室であったが、そこに多数の門弟が集まった。塾生からは、後に自由民権運動に加わり衆議院議員となる島田孝之や県立農学校（現南砺福野高校）の創設に尽力した島巖、中越銀行取締役で衆議院議員となった安次次左衛門を始め、千光寺住職松田快禅等の僧侶や神官師弟、医師など、中央に地方あって明治維新の激動期に信念をもって活躍する多くの人材を輩出した。

明治2年（1869）に砺波郡治局の内意によって杉木新町に杉木教学所が開設されると講師として迎えられ、また戸長（現町村長）の役にも就いた。明治5年（1872）学制発布後の明治6年（1873）以後中田村、頼成村等の小学校の創立に関わり、砺波地域の教育の発展に尽力した。

明治11年（1878）11月2日、流行性の病気のため、逝去。享年48歳。

<専門員 眞田 武志>

平成30年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



高岡大仏の彫刻家

なかの そうざん
中野 双山 (1881~1940)

明治14年（1881）、中野又次郎の長男として射水郡高岡町定塚町（現高岡市定塚町）に生まれた。富山県工芸学校鑄銅科（現高岡工芸高校）で、鑄物の原型の作り方を学ぶうち、銅器の彫刻家になりたいと考え、明治36年（1903）に東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）に進み、木彫などを学んだ。

明治33年（1900）6月の大火で焼失した木造の高岡大仏を作り直そうという機運が明治30年代後半に高まると、母校の工芸学校で教師をつとめる傍ら原型師の仕事に携わっていた双山に、燃えにくい青銅で作る原型づくりの依頼があった。双山が27歳の時で当時、「原型師」の専門家は地方にはほとんどいなかった。

大仏製作に着手すると日々製作に没頭し、明治44年（1911）9月には、大仏の頭を完成させた。しかし、その後は資金不足などの理由で作業はたびたび中断した。ようやく開眼式を迎えたのは、大火以来、実に33年経た昭和8年（1933）5月であった。

大仏の頭部の完成後は、県内各地の像製作の傍ら、書画の製作や作陶、富山県立工芸学校の初代同窓会長を務めるなど趣味や人の世話にも熱心であったが、昭和15年（1940）9月5日に一生を終えた。享年59歳。

<専門員 福田 暁>

特別展

富山県内の幼児教育(幼稚園・認定こども園)活動紹介展

4月18日(水)～5月27日(日)



県内初の幼児教育施設「富山県尋常師範学校幼児保育所」の創設から130年を記念した研究紀要「富山県幼稚園教育130年のあゆみ」を3月に発行しました。それに合わせ、現在の幼稚園・認定こども園の活動の様子がわかる展示を企画しました。各園に、自園の特色ある活動を写真2枚に表す「園活動紹介紙」の作成をお願いすると、約60の園から紹介紙が届きました。それらを学校教育の変遷と幼稚園教育の関わりを表すパネルとともに展示紹介しました。

研究紀要「富山県幼稚園教育130年のあゆみ」執筆関係者

☆教育資料部会

部会長…布村 徹 副部会長…竹島 慎二

委員長…相川 仁

専門委員

飛騨 英樹 山林 久恭 藤嶋 広樹 山吉 信夫

岩崎 泰明 小嶋 剛 亀村 美咲 竹内 悠子

監修

廣田 仁美 波岡 伸郎



恒例展

第9回「児童・生徒によるものづくり展」

6月6日(水)～7月8日(日)



県内には、高岡市のものづくり・デザイン科の取り組みをはじめ、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。教育記念館では、発表の場のひとつとして毎年「児童・生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年も180点余りの作品が寄せられました。また立山町教育委員会のご好意により、立山町の7小学校共同製作「ふるさとカルタ」原画も展示しました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

恒例展

クイズ&パズル 第16回 さんすうワールド展

7月18日(水)～8月26日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうと20問のクイズや立体パズル等を展示しました。また、楯円ビリヤード等の大型教材(秋山仁先生が中心となり開発・製作)や積木パズル「キューボロ」(プロ棋士の藤井聡太7段が幼い頃に愛用)も好評でした。テレビでも紹介されたので、多くの家族連れが訪れ、暑い中でしたが、考える楽しさを味わっていました。

きらめき未来塾 (夏休み期間中)

お笑い道場 講師 安野家 仁楽斎
(社会人落語家)

右脳活用道場 講師 森 みちこ
(漫画家)

思考道場 講師 大甲 恵美 松原 千佳
杉田 直人 川口 和彦
前田 正秀



右脳活用道場

子供たちの創造力や表現力、柔軟な思考力を養うことをねらいに、今年度も夏休み中に3つの道場を開催しました。参加した子供たちは、講師の先生方にいろいろなことを教えてもらい、チャレンジしながら大いに活動を楽しむことができました。

平成30年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業

子供が地域の人や自然、歴史、文化にかかわる「ふるさと学習」等に地域と連携して取り組む学校に助成する事業です。今年度は次の5校が助成校となりました。



29年度助成校の1校 高岡市立福岡小学校
〈・小矢部川を守ろう 〉 ・つくりもん大作戦

・助成校・

- 滑川市立北加積小学校
- 富山市立四方小学校
- 射水市立放生津小学校
- 砺波市立出町小学校
- 氷見市立灘浦小学校

恒例展「第15回子どもの目、自然不思議発見写真展」

9月5日(水)～10月7日(日)

小学校での学習や日頃の生活の中から、子供たちの目を通して発見しためずらしい自然界の場面を撮影した写真を89点展示しました。「子供たちの目から見た(感じた)風景等が面白かったです。家に飾ってみたい写真もありました…」等、参観者からのあたたかい評価をたくさんいただくことができました。



どんぐりが、いっぱい！(1年)



笑っている!? (2年)



わらっている?おこってる? (3年)



とんほのメガネ? (4年)



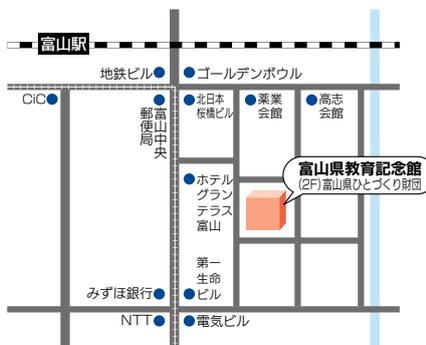
二重になっているにじ(5年)



木と雲のシンクロ (6年)

これからの展示予定

- ・ 特別支援学校 みんながんばってます作品展 10月26日(金)～11月11日(日)
- ・ 富山県造形教育作品展 11月17日(土)～12月2日(日)
- ・ 「アイデアロボットフェスタ」ロボット展 12月8日(土)～1月20日(日)
- ・ 富山県中学校美術展 1月25日(金)～2月10日(日)
- ・ 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 2月20日(水)～3月24日(日)



あ・と・が・き

今年の夏は全国的に記録づくめの酷暑となりました。上陸した台風の数之多さからも、まさしく異常気象と呼べるでしょう。このような気候変動のみならず、このところの国際情勢を考えると、地球号の一員としては、心配事が多いこの頃です。この館報がお手元に届くころには、郷土先賢室での新しい顕彰展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。

富山駅
近く

会議室を一般の方に安価でお貸しして、打合せや趣味の活動などにご利用いただいております。詳しくは教育記念館ホームページをご覧ください。
<http://www.t-hito.or.jp/reserve/index.html>

会議室をご利用ください!

